

## 原 著

# ヒト舌における軟骨組織の病理学的研究

## 第3報 軟骨腫性病変

武田 泰典 宮沢 秋裕 菊地 博生

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座\* (主任: 鈴木鍾美教授)

[受付: 1984年12月15日]

**抄録:** 舌にみられた軟骨腫性病変2例の病理組織所見を述べるとともに、これらの組織由来について筆者の既報の結果をもとに考察を加えた。症例1は軟骨組織とともに他の間葉系成分が混在してみられ、これまでに cartilaginous hamartoma として報告されているものと同様の所見を呈した。したがって、本例は胎生期の複数の遺残芽組織に由来したものと考えられた。症例2は大部分が軟骨組織よりなり、その発生部位から舌腭膜部に生じたものと考えられた。したがって、本例は筆者の既報の結果と併せて化生的機序により生じた軟骨組織に由来したものと推察された。

**Key words:** cartilaginous tumor, tongue, hamartoma, histogenesis.

## I 緒 言

口腔領域の軟部組織に生ずる軟骨腫性病変はまれなものであるが、その多くは舌に生じている<sup>1)</sup>。これらの病変を真の腫瘍として扱おうか否かについては未だ見解の一致をみるには至っていないが、その由来としては胎生期に迷入した軟骨芽組織あるいは化生的機序により生じた軟骨組織が考えられている。しかしながら、軟部軟骨腫性病変の最も多くみられる舌における迷入軟骨組織ならびに化生的機序により生じたと考えられる軟骨組織の詳細について形態的検討を試みた報告は未だない。筆者はヒト舌における軟骨腫性病変の組織発生を明らかにする目的で舌の手術材料を用い、軟骨組織の存在の有無、その分布様式ならびに超微構造所見などにつき検討を加え、報告してきた<sup>2,3)</sup>。今回は第3

報(終報)として病理組織検査のために当講座で扱った手術材料のなかから舌に生じた軟骨腫性病変について組織所見を中心に報告し、それらの由来について考察を加えた。

## II 検 索 材 料

今回検索に用いた材料は岩手医科大学歯学部口腔病理学講座で扱った病理組織検査材料のうち舌に生じた軟骨腫性病変2例である。この2例は23歳(症例1)と46歳(症例2)の女性で、臨床所見の詳細は小川ら<sup>4)</sup>ならびに大橋ら<sup>5)</sup>がそれぞれ報告している。なお、症例1は顎顔面ならびに指趾領域に奇形を有し、oral-facial-digital syndrome と診断されていた。これら2例の手術摘出材料は10%ホルマリンにて十分固定後、軽く脱灰し、通法の如くパラフィン切片を作製、ヘマトキシリン・エオジン、アザン

Pathological study on cartilaginous tissue in the human tongue. Part 3. Cartilaginous tumors.

Yasunori TAKEDA, Akihiro MIYAZAWA and Hiroo KIKUCHI

(Department of Oral Pathology, School of Dentistry, Iwate Medical University, Morioka 020)

\* 岩手県盛岡市内丸19番1号 (〒020)

Dent. J. Iwate Med. Univ. 10: 1-5, 1985

マロリー, エラスチカワンギーソン, アルシアン青の各染色を施し鏡検した。

### III 経 果

#### 症例 1

材料は舌背中央部やや左側よりの部位から摘出された小指頭大で球状の腫瘤で、弾性硬を呈した。切割時には軽度の抵抗を感じ、断面は黄白色を呈した。組織学的に腫瘤は hyperortho- and para-keratosis を呈する重層扁平上皮におおわれ、上皮脚はやや不規則となっていた。上皮下にはリンパ球と形質細胞を主とした小円形単核細胞のびまん性浸潤が軽度認められた。腫瘤内には径 2 mm 前後の類円形あるいは長円形を呈する軟骨組織小塊が散見された (Fig. 1a)。これらの軟骨組織小塊内には不規則に錯走する線維成分 (膠原線維) が少量みられ、また、軟骨組織周縁と周囲結合組織の境界は一部を除いて明瞭であった (Fig. 1a)。軟骨組織内にはごくわずかながら微細な弾性線維も散在していた。軟骨細胞には異型的な所見はなかったが、軟骨細胞の配列は正常のものにくらべ著しく不整を呈していた (Fig. 1b)。また、軟骨組織中央部の軟骨小腔ならびに軟骨細胞は類円形を呈するのに対して、軟骨組織周縁部の軟骨小腔ならびに軟骨細胞は紡錘形を呈していた (Fig. 1b)。なお、本症例の腫瘤内にはこれら軟骨組織小塊の他に脂肪組織、横紋筋線維束、小唾液腺に類する粘液腺、ならびに線維性結合組織が混在していた。

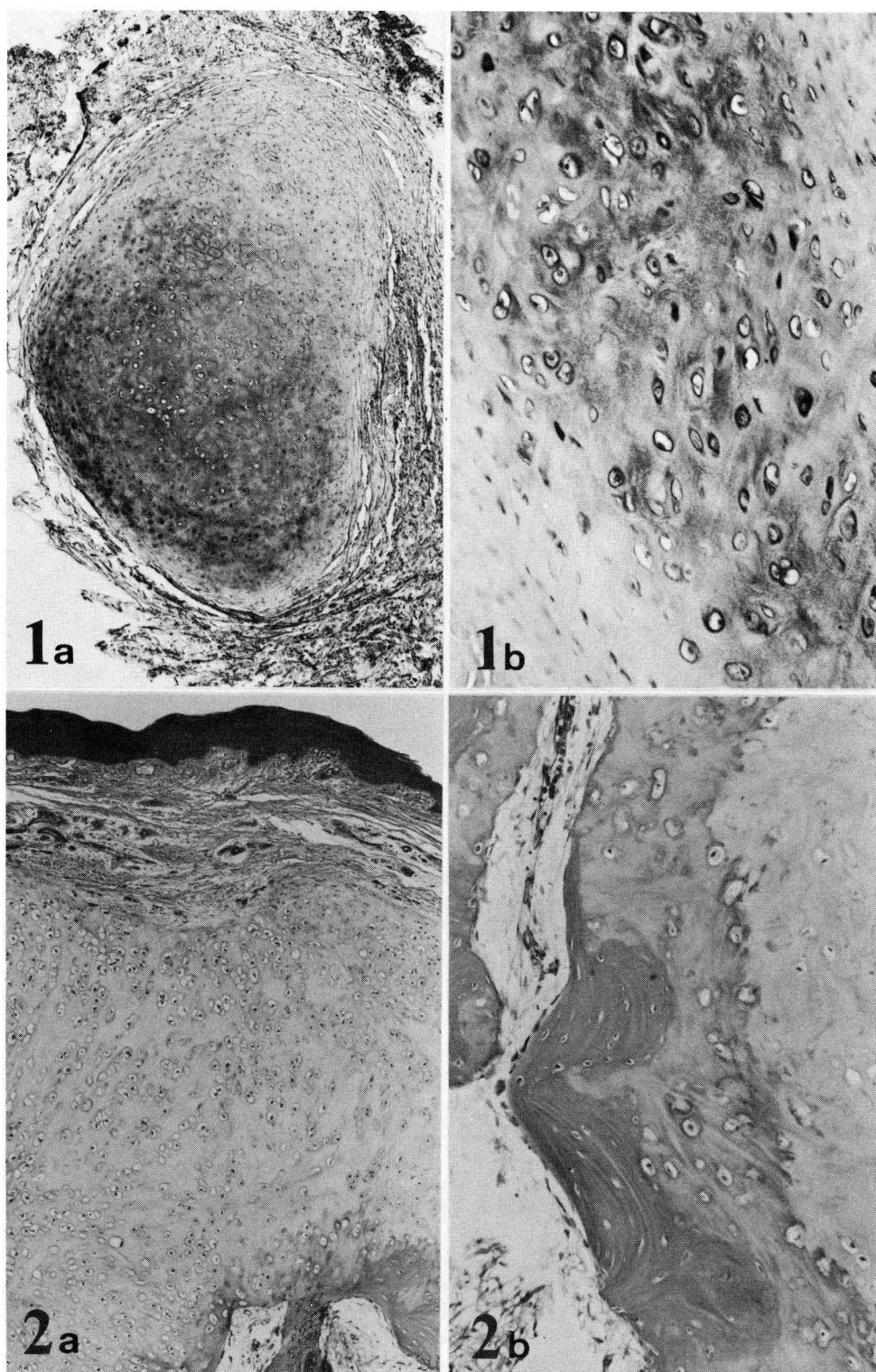
#### 症例 2

材料は舌尖部から約 1 cm 後方の舌背正中部やや左側よりの部位から摘出された半球状の腫瘤で、骨様硬を呈した。切割時にはかなりの抵抗が感じられ、断面は灰白色であった。組織学的に腫瘤は hyperortho- and para-keratosis を呈する重層扁平上皮におおわれていたが、上皮の肥厚、上皮脚の不規則化はなく、また、固有層における炎症性細胞浸潤もみられなかった。腫瘤のほとんどは軟骨組織からなり、この軟骨組織と粘膜固有層との間には比較的小血管に富

んだ菲薄な線維性結合組織層が介在していた (Fig. 2a)。軟骨組織と周囲線維性結合組織との境界は明瞭であった。また、この軟骨組織塊は菲薄な線維性結合組織層を介して下方の筋組織を圧迫していた。軟骨小腔ならびに軟骨細胞は類円形であり、これらの軟骨細胞は単独にみられるものから、4~5 個が集合してみられるものまで種々の配列を呈したが、個々の軟骨細胞の異型的所見は明らかでなかった。軟骨基質は好酸性で硝子様を呈したが、一部には不規則に錯走する膠原線維束もわずかながら認められた。しかし、弾性線維はみられなかった。さらに、本症例においては軟骨組織塊中央部に疎な線維性結合組織を容れ、不規則な外形を呈する骨髓腔様の空隙がみられ、この部分に面する軟骨組織の一部には明らかな骨化が認められた (Fig. 2b)。この様な軟骨性骨化の生じている部分ではその骨髓腔様空隙面に一層の骨芽細胞が接していられた。

### IV 考 察

良性の軟骨腫瘍には軟骨腫、軟骨骨腫、軟骨芽細胞腫、軟骨粘液様線維腫の 4 型が挙げられているが、口腔領域における良性軟骨腫瘍は主として軟骨腫と軟骨骨腫が報告されている<sup>1)</sup>。しかし、口腔領域での良性軟骨腫瘍の発現頻度は著しく低いようである。これら口腔領域に生ずる良性軟骨腫瘍のほとんどは顎骨内部ならびに骨膜部 (外骨膜性軟骨腫) にみられ、その組織発生としては関節突起の軟骨組織、Meckel 軟骨や縫合部の線維軟骨の遺残、鼻中隔軟骨組織などが挙げられており、さらに、骨原性の幼若な間葉組織の軟骨化生に由来する可能性も示唆されている。一方、まれには顎骨外の軟部組織中にも軟骨腫と同様の病変のみられることがある。この様な軟部組織に生ずる軟骨腫性病変は口蓋、頬部、歯肉にみられることもあるが、その多くは舌に生じている<sup>2)</sup>。この舌に生ずる軟骨腫性病変の多くは舌背正中の後方部にみられることより、その組織由来として胎生期に舌盲孔部へ迷入した軟骨芽組織が考えられてい



**Fig. 1** Cartilaginous tissue with marked irregularity of histological structure in the lesion of case 1.

**Fig. 2** Cartilaginous tissue with partial ossification in the lesion of case 2.

た<sup>7)</sup>。しかしながら、このような病変は舌盲孔近辺のみならず、舌尖部や舌縁部にもみられることから、その組織由来も軟骨芽組織の迷入説以外に化生的機序によるとするもの、軟骨成分に富んだ混合腫瘍あるいは奇形腫とするものなどの諸説がある。しかしながら、これらの説はあくまでも推測の域を出ず、したがって、舌における腫瘍芽となり得るような軟骨組織の存在やその分布について詳細な検討を加えた報告はなかった。そこで筆者はこの点を明らかにすることを目的としてヒトの舌手術摘出材料にて検討を試みた結果、舌盲孔のみならず、舌中隔部や舌腭膜部にも軟骨組織がみられ、これらの由来として胎生期の芽組織の迷入によるものと化生的機序により生ずるものがあることを第1報ならびに第2報として明らかにしてきた<sup>2,3)</sup>。すなわち、胎生期の軟骨芽組織が迷入したと考えられる場合、その軟骨組織は弾性線維を含んでおり、境界明瞭で、かつ、舌の比較的深部に認められた。一方、化生的機序により生じたと考えられるものは主として舌腭膜部に生じ、周囲組織との境界は不明瞭で、かつ、弾性線維は認められなかった。そこで今回は第3報（終報）として、岩手医科大学歯学部口腔病理学講座で実際にとり扱った軟骨腫性病変の2症例についてその由来を考察する。まず、症例1は病変部に弾性線維を含む軟骨組織小塊が散見されたが、この他に脂肪組織、小唾液腺に類する粘液腺、筋組織などの他の間葉系成分が混在してみられた。このような症例について戸塚ら<sup>8)</sup>は自験例1例を加えて文献的考察を行っており、cartilaginous hamartoma（軟骨性過誤腫）と診断している。今回報告した症例1もこれに該当すると考えられる。勿論、この cartilaginous hamarto-

ma とされているものは真の腫瘍ではなく、胎生期の複数の芽組織の遺残に因るものであり、自律的な増殖は認められない。また、この舌に生ずる cartilaginous hamartoma は他の奇形に合併してみられることがあり、本症例も臨床的に oral-facial-digital syndrome と診断されていた。次に症例2は病変部のほとんどが弾性線維を含まない軟骨組織から構成されており、病理組織学的に軟骨腫と診断されるが、一部に軟骨性骨化による骨組織の形成がみられたことより、骨軟骨腫とした方がより適切かもしれない。この症例2の軟骨組織塊とそれをおおう粘膜固有層との間に菲薄な線維性結合組織層が介在してみられた。また、この軟骨組織塊は菲薄な線維性結合組織層を介して下方の筋組織を圧迫していた。したがって、本例は舌腭膜部に生じたと考えられ、その発現機序としては第2報<sup>3)</sup>で報告した結果と併せて化生的なものが十分考えられる。

## V 結 語

舌にみられた軟骨腫性病変2例の病理組織所見を報告し、これらの組織由来について筆者の既報の結果をもとに若干の考察を加え以下の結論を得た。

1. 症例1は病変部に軟骨組織以外に他の間葉系成分が混在してみられ、これまでに cartilaginous hamartoma として報告されているものと同様の所見を呈した。本例は胎生期の複数の芽組織の遺残に由来したと考えられた。

2. 症例2は大部分軟骨組織よりなり、舌腭膜部に生じたと考えられた。本例は筆者の既報の結果と併せて化生的機序により生じた軟骨組織に由来したと思われた。

**Abstract :** Histopathological findings of two cases of cartilaginous tumor arising in the tongue are reported and the histogenesis of these lesions is discussed. The lesion of case 1 (a 23-year-old female) consisted of several small cartilaginous masses and other mesenchymal elements such as adipose tissue, mucous gland or muscle tissue. This case was diagnosed as cartilaginous hamartoma, which might originate from embryonic rests or pluripotential mesenchymal cells. The lesion of case 2 (a 46-year-old female) consisted of a large mass of cartilaginous tissue with partial ossification, and probably occurred in the aponeurosis linguae. This case was diagnosed as chondroma or osteochondroma, which might originate from metaplastic cartilaginous tissue in the aponeurosis linguae.

文 献

- 1) 石川梧朗: 口腔病理学II, 改訂版, 永末書店, 東京, 京都, 562-563, 1982.
- 2) 武田泰典, 嶋中豊彦, 鈴木鍾美: ヒト舌における軟骨組織の病理学的研究, 第1報, 舌中隔中の軟骨組織 (いわゆる Knorpelinsel), 岩医大歯誌, 9: 63-69, 1984.
- 3) 武田泰典, 宮沢秋裕, 八幡ちか子: ヒト舌における軟骨組織の病理学的研究, 第2報 舌腱膜中の軟骨組織, 岩医大歯誌, 9: 139-147, 1984.
- 4) 小川邦明, 中里滋樹, 白石信也, 大屋高德, 藤岡幸雄, 三浦廣行, 鈴木鍾美, 嶋中豊彦, 宮沢秋裕: Oral-facial-digital syndrome の一症例, 日口外誌, 22: 354-362, 1976.
- 5) 大橋靖, 茂木健司, 猪苗代盛昭, 岸根克彦, 富谷吉二郎: 舌に発生した Chondroma の1例について, 日口科誌, 22: 507, 1973.
- 6) Zegarelli, D.J.: Chondroma of the tongue. *Oral Surg*, 43: 738-745, 1977.
- 7) Roy, J.J., Klein, H.Z., Tipton, D.J.: Osteochondroma of the tongue. *Arch Pathol*, 89: 565-568, 1970.
- 8) 戸塚盛雄, 結城勝彦, 清水正嗣, 上野正: 舌に生じた Cartilaginous hamartoma の1例, 日口外誌, 23: 418-421, 1977.